

ダイグロシア的状况におけるシンハラ語の受動文

デ シルバ K. G. K., 宮岸 哲也

Sinhala Passive Constructions in Diglossic Situations

De SILVA, K. G. K., Tetsuya MIYAGISHI

要 旨

口語シンハラ語には典型的な受動構文がなく、文語シンハラ語には典型的な受動構文が存在するというシンハラ語研究者の共通認識により、両者を結びつける関係性や連続性については、ほとんど考慮されてこなかった。本稿ではシンハラ語の口語体、準文語体、文語体の受身进行分析し、受動動詞 (P verb) がいずれのスタイルでも受動文が作れることと、準文語体と文語体の双方で受動動詞 (P verb) 受動文と迂言的受動文がそれぞれ同様に典型的な受動文を作れることを指摘し、両者に関係性や連続性があること主張する。

キーワード：受動動詞、準文語体、口語体、文語体、典型的受動

は じ め に

本論は、能動性を減少させるという受身の機能に注目し (Shibatani 1985)、口語と文語のシンハラ語受動文の関係性と連続性について述べる。従来、シンハラ語には文語と口語のダイグロシア (diglossia) が存在し、文語にのみ [動詞分詞形 + *laba*] のような迂言的受動形式があり、口語には受身が存在しないことと、口語では受動動詞 (P verb) と呼ばれる動詞があるものの、受動文は作ることが出来ず、自動詞や無意志動詞として使われることが述べられてきた。このように、シンハラ語の受身に関する先行研究では、文語と口語が全く別ものとして議論されてきたが、それは、受身の定義が「Taro was hit by Jiro」のような被動者が動作主に入れ替わって主語となるような受身に限定されていたためであり、Shibatani (1985) が指摘する受身の機能に従えば、自動詞や無意志動詞として解釈される受動動詞 (P verb) も受身として扱うことができる。しかも、口語と文語の中間的な特徴を持つ準文語的な表現が、新聞、ニュース番組、公的なスピーチなどで頻繁に用いられるようになった現代のシンハラ語では、[動詞分詞形 + *laba*] の文語の受動文と、準文語の受動動詞 (P verb) 文の間に、形式的な違いはあっても、意味的な違いが明確では無い例が見られる。このような準文語のシンハラ語は、規範文法の観点から正しくないシンハラ語というレッテルを貼られ、シンハラ語研究が扱うべき純粋な対象とは見なされてこなかった。しかし、ダイグロシアという環境において、新たに生まれた準文語形式が広がっていくのは、何らかの合理的な要因があるからである。

本論では、先行研究から口語と文語の受動文の、形態的、統語的、意味的特徴をまとめた上で、準文語の受動文がどのような特徴を持つのかを示す。そして、これらの受動文を比較し、どのような関係性や連続性を持つのかを明らかにする。これにより、シンハラ語の受動文に関するより包括的で、体系的な分析が可能になると考える。

1. 先行研究

従来、口語シンハラ語動詞は形態論的・意味論的に、A verb (Active verb: 能動動詞), P verb (Passive verb: 受動動詞), C verb (Causative verb: 使役動詞) に分類されてきた (Gair 1970: 33-34)。そして、このP verb (受動動詞) を述語に持ち、動作主が後置詞 *atin* で示される文が口語の受動構文 (Passive clauses) として扱われてきた (Gair 1970: 73)。

- (1) *lamea atin kurullawə məree-wi.* (Gair 1970: 74)

子ども よって 鳥 殺される-だろう
その鳥はその子供によって殺されるのだろう。

しかし、その後の研究者 (Gunasinghe 1985, Gunasinghe and Kess 1989, Inman 1993, Gair 1998 など) が、後置詞 *atin* で示された動作主と P verb (受動動詞) を述語に持つような文は、典型的な受動文ではなく、むしろ、自動詞文や無意志動詞文を作ることの指摘するようになる。(因みに (1) は、正確には「その鳥は子供が意図せず死なせてしまうだろう」のような意味を持つ。) 従って、これらは本当の意味での受動構文ではなく (Gair 1998: 68), 口語シンハラ語には受動構文がないことと (Gair 1998: 142), 口語シンハラ語の無意志動詞構文 (involitive construction) と無動作主構文 (agentless construction) は、英語のような言語に見られる典型的な受動構文とは決定的に異なる (Henadeerage 2002: 4) というような考え方が、シンハラ語学研究者の中で支配的になる。

一方、文語シンハラ語には迂言的受動構文があり (Gair and Karunatilaka 1974: 59), 受動構文がない口語シンハラ語と受動構文がある文語シンハラ語が明確に区別されている (Gair 1998: 144)。文語シンハラ語では、動詞語幹に *nu* を後接させた形式の受動分詞 (passive participle) に *labənəwa* (もらう) や *læbenəwa* (*labənəwa* の受動動詞) を後置した述語形式が、*wisin* (～によって) で標示された動作主をとることで受動文を作ることの示している。

- (2) *lamea wisin wədə kərənu læbee.* (Gair and Karunatilaka 1974: 59)

子ども よって 仕事 する.PP もらう
その仕事は子供によってなされる。

なお、受動動詞については、13世紀に書かれた最も古い文法書である *Sidat Sangaravə* の第7章の言語体系 (*kiriya sade*) の説明の中にも見られ、動詞の構造 (*piyo*) として能動動詞 (*katu piyo*), 準動詞 (*hav piyo*), 受動動詞 (*kam piyo*) の三つに分けている。受動動詞 (*kam piyo*) は、受動動詞, 再帰動詞, 無意志動詞, 迂言的受け身に分類されており、受動態が広い意味で取られていることが分かる。

その一方で、口語シンハラ語には受動構文がなく、あったとしても非典型的な受動構文としか見なされないこと、その一方で、文語シンハラ語には典型的な受動構文が存在することが、シンハラ語研究者の共通の認識として定着した。そして、両者は意味的にも形式的も異なる別物として扱われ、両者を結びつける関係性や連続性については、ほとんど考慮されてこなかった。しかし、Wijayawardhana, Wickramasinghe and Bynon (1991) は、Shibatani (1985) の「能動性を減少させる文法的形式」という受動の機能が、シンハラ語のP verb (受動動詞) にも見られることから、この動詞による非典型的な受動構文も受動構文として見なしている。本論もその立場に立ち、受動構文を、典型から非典型に至る非能動性の様々な程度を表す構文として捉える。そして、この受動構文の意味において、口語と文語のシンハラ語を隔てることなく、分析することを試みる。

この試みは、実は今まであまり研究されてこなかった、純粹には口語とも文語とも言えない準文語シンハラ語の受身に焦点を当てることになる。準文語自体は、既にSugunasiri (1970: 10) でも、公式的口語 (Vernacular Formal) という用語で取り上げられ、政治的な演説、大学での講義、ラジオでのトーク、子供向けの文学作品、宗教的な説教、新聞記事 (特に写真のキャプション)、学術論文などに見られる。Sugunasiri (1970: 11) は、この公式的口語を口語と文語との比較において、以下のようにまとめている。

	非公式的	公式的
口語	yes	no
公式的口語	yes	yes
文語	no	yes

準文語体における受動文の使用については、Abhayasinghe (1973: 133) が述べている。Abhayasinghe (1973: 133) は、口語シンハラ語において意志的で他動的な動作動詞は、受動文にはならないとしつつも、公式的な場面では、教育を受けた話し手が文語シンハラ語の影響を受けて、意志的で他動的な動作を表す場合でも、受動動詞文 (= 無意志の他動詞文) を用いることを指摘している。ただ、準文語体の受動構文についての形式的、意味的分析は行われていない。

従って、本論では、口語と文語の受身の関係性・連続性を明らかにするために、口語と文語の受身と比較しながら、準文語の受動文を中心に統語的、意味論的分析を試みる。

3. 研究の方法

本研究は、口語と文語の受身の関係性・連続性を明らかにするために、口語、準文語、文語に分けて、受動動詞文の統語論的・意味論的分析を行う。なお、文語体とそれ以外は、主語と動詞の一致の有無で明確に区別できるが、口語体と準文語体の受動構文の違いは、Abhayasinghe (1973: 133) では明確ではない。そこで、本稿ではまず、表1のような暫定的な基準を作った。

	口語体	準文語体	文語体
受動動詞文の形式	P verb (受動動詞)	P verb (受動動詞) 迂言的受身	P verb (受動動詞) 迂言的受身
主語と動詞の一致	なし	なし	あり
動作主標示 (任意)	<i>atin</i>	<i>atin / wisin</i>	<i>wisin</i>
動詞のスタイル	口語的	文語的	文語的
人称代名詞	口語的	文語的	文語的

表1 口語, 準文語, 文語の受動動詞文の暫定的分類基準

口語の受動動詞文は受動動詞 (P verb) が使われ、主語と動詞の一致が見られない文である。動作主は義務的に現れるわけではないが、現れる場合は後置詞*atin*が用いられる。なお、*atin*は元々は名詞*ata* (手) の具格・奪格形 (手で・手から) であるが、文法化が進み、無意志的な動作主を表すことに特化した形式である。使用される述語動詞や人称代名詞は口語的なスタイルのものである。

準文語の受動動詞文は、意志的で他動的な動作を表す場合でも受動動詞 (P verb) が用いられる場合と、迂言的受動動詞構文が用いられる場合の二つがあり、いずれの場合も主語と動詞の一致が見られない。動作主は義務的に現れるわけではないが、現れる場合は準文語専用の後置詞*atin*や*wisin*が用いられる。使用される述語動詞や人称代名詞は文語的なスタイルのものである。

文語の受動動詞文も、意志的で他動的な動作を表す場合でも受動動詞 (P verb) が用いられる場合と、迂言的受動動詞構文が用いられる場合の二つがある点では、準文語の受動動詞文と同じである。但し、いずれの場合も主語と動詞の一致が見られる点で異なる。また、動作主は義務的ではないが、現れる場合は後置詞*wisin*が用いられる。使用される述語動詞や人称代名詞は文語的なスタイルのものである。

なお、動詞のスタイルとして、口語と文語の区別が可能な場合とそうでない場合がある。例えば、*kiyanəwa* (言う, 歌う) は口語的で、*gayənəwa* (歌う), *pavəsənəwa* (言う) は文語的である。*mərənəwa* (殺す), *otənəwa* (巻き付く), *tambənəwa* (ゆでる), *liyənəwa* (書く), *naṭənəwa* (踊る) は口語でも文語でも使われる。一方、人称代名詞は口語では*mamə* (私), *oyaa* (あなた) *eyaa* (彼・彼女) で、文語では、*maa* (私), *oba* (あなた) *ohu* (彼), *əya* (彼女) である。

データは、インターネットから収集したほか、筆者による作例も含まれ、それらを上記の基準により、口語体、準文語体、文語体に分けた。更に、それぞれが、どのような構文をとり、どのようなヴォイスの意味を持つのかを分析・分類した。具体的に言うと、典型的な受身なのかどうか、典型的な受身ではない場合は、自動詞、自発 (無意志動詞)、可能、習慣等により細分類した。最後に、口語体、準文語体、文語体の受動文を総合的に分析し、口語体的な受動文 (受動動詞P verbによる受動文) と文語体的な受動文 (迂言的受動文) の間の相違点と共通点を指摘しながら、両者の関係性や連続性について考察した。

4. 口語体のシンハラ語の受身

口語体の受動文は、受動動詞 (P verb) による受動文で、主語と動詞の一致がなく、動作主が示される場合は、後置詞の*atin*が用いられる。従来の研究では、受動動詞 (P verb) による受動文は、典型的な受身の意味を表さないと言われてきた。(3)～(6)の動詞は、それぞれ他動詞 *marənəwa* (殺す), *otənəwa* (巻きつける), *tambənəwa* (ゆでる), *liyənəwa* (書く) がウムラウトにより変化した受動動詞である。これらの例は、典型的な受身の意味ではない。

- (3) *minissu oksijən nætiwa mærenəwa.* <自動的>
人々 酸素 ないと 死ぬ
人々は酸素がないと死ぬ。
- (4) *nuul boolee kaṇuwəkə etenəwa.* <自動的>
糸 ボール.LOC 巻き付けられる
糸がボールに巻き付く。
- (5) *oolu haal waləṭə waḍaa ikmənin taṇə haal tæmbenəwa.* <自動的/可能>
oolu米.PL.DAT より 早く taṇə 米 ゆでられる
taṇə米はoolu米よりも早くゆで上がる／炊ける。
- (6) *sinhalen liwwəmə ibeemə ingriisiyen liyəwenəwa.* <自動的>
シンハラ語.INST 書くと 自動的に 英語.INST 書かれる
シンハラ語で書くと、自動的に英語で書かれる。

また、(7)の例は、動作主が存在する他動的な行為であっても、動作主から無意志的に或いは、習慣的・自動的に行われる行為であるため、無意志動詞構文として解釈される。(8)では、自動詞*naṭenəwa* (踊る) が自発的な行為を表している。

- (7) *keenti giyaamə səra wacənə kiṇəwenəwa.* <自発>
怒ると 厳しい言葉 発せられる
怒ると厳しい言葉が発せられる
- (8) *sinduwak əhenə koṭə maṭə nikammə nəṭenəwa.* <無意志・自動的>
歌 聞く とき 私.DAT ただ 踊られる
私は歌を聞くとつい踊ってしまう。

5. 準文語体のシンハラ語の受身

5.1 典型的な受動文

準文語体の受動文は、受動動詞 (P verb) か迂言的受動構文が用いられるが、主語と動詞の一致がない点で、文語シンハラ語とは異なる。また、動作主が示される場合は、後置詞*atin*や*wisin*が用いられる点で、口語体の受動文とも異なる。(9)～(12)の例は、いずれもaが受動動詞 (P verb) による受動文で、bが迂言的受動構文である。どちらも、典型的な受動文の意味を有しているが、(11) bのように動作主が人間ではない場合もある。

- (9) a *mee padə wələ dayaa mahatmiyə atin liyəwenəwa*
 この 詩 ダヤー 夫人 よって 書かれる
 これらの詩はダヤー夫人によって書かれている。
- b *ohu wisin swəyam caritaapədaanəyak liyənu labənəwa.*
 彼 よって 自伝.INDF 書く.PP もらう
 自伝は彼によって書かれる。
- (10) a *mee prasəŋgəyedii magee giila 24k gəyənəwa.*
 この コンサート.LOC 私.GEN 歌 24.INDF 歌われる
 このコンサートでは私の24曲の歌が歌われる。
- b *memə giitəyə supar ştaar harəhaa bihi wuu gaayəkə gaayikaawan wisin*
 この 曲 スーパースター 通じて 登場した 歌手 よって
gayənu labənəwa.
 歌う.PP もらう
 この曲は、スーパースター（という番組）に登場した歌手によって歌われる。
- (11) a *ohu atin uḍa pandu rəkenəwa.*
 彼 よって ボール キープされる
 ボールは彼によってキープされる。
- b *dharməyehi həsirennəa dharməyə wisin rakinu labənəwa.*
 ダルマ.LOC 実践者 ダルマ よって 守る.PP もらう
 ダルマの実践者はダルマ自体によって守られる。

なお、迂言的受動構文でも、(12) のように準文語体では動作主が*wisin*で標示されない場合もある。

- (12) *əyə emə behetə yam kisi tənəkə sa'gəwənu labənəwa.*
 彼女 その 薬 どこか 場所.LOC 隠す.PP もらう
 その薬物は彼女によって、どこかに隠されている。

5.2 非典型的な受動文

(13) の動詞は*marənəwa*（殺す）がウムラウトにより変化した受動動詞で、無意志的な行為を表している。この動詞だけを見ると、口語と文語の区別ができないが、三人称代名詞が文語的であるため、文全体としては準文語体であると判断できる。(13) は「彼は動物を間違えて死なせてしまう」という意味に近い。なお、(8) のような例は人称代名詞が使われていないため口語体でも準文語体でも解釈することが可能である。

- (13) *ohu atin satek mærenəwa.*
 彼 よって 動物.INDF 殺される
 動物は彼によって殺される（無意志的に）

(14) (15) では、口語と文語で区別される動詞が使われ、いずれもaが口語体でbが準文語体であると判断できる。*hæ"genəwa* (隠れる) と *kiyāwenəwa* (歌われる) 口語的で、*sæ"gəwenəwa* (隠れる) と *gæyenəwa* (歌われる) とは文語的である。

(14) a 口語体

ira d"dura-ɬə hæ"genwa. <自然に>
太陽 暗闇-DAT 隠れる
太陽が暗闇に隠れる。

b 準文語体

irə muhudee sæ"gəwenəwa. <自然に>
太陽 海.LOC 隠れる
太陽が海に隠れる。

(15) a 口語体

simdu kiyanna oonee næ ibeemə kiyāwenəwa. <自発>
歌 歌う 必要 ない 自動的に 歌われる
歌を歌う必要はなく、自発的に歌われる。

b 準文語体

oonə mə weḍin ekəkə, paatīyəkə, ɾip ekəkə sunil pereeraagee
どんな 結婚式.LOC パーティー .LOC 旅行.LOC スニルベレラ.GEN
gūiyak gæyenəwa. <習慣>
歌.INDF 歌われる
どんな結婚式でもパーティーでも旅行でも、スニルベレラの歌が歌われる。

(9)～(11)でのaとbの比較、及び、(13)～(15)のbにより、準文語体での二つのタイプの受身は表2のようにまとめとができる。

受動文のタイプ	動作主標識	受動文の意味
P verb受動文	<i>atin</i>	典型的／非典型的受動文
迂言的受動文	<i>wisin</i>	典型的受動文

表2 準文語体の受動文

6. 文語シンハラ語の受身

書き言葉では、受動動詞も迂言的受身も使われている。Gunasinghe (1985: 109) は、シンハラ語の受身の文語体が、自然に習得されるのではなく、学校で学習される最も習熟されていない構造の一つであることと、迂言的受身が歴史的に翻訳のために使われていたこと、現在では受動動詞受身と迂言的受身の両方が使われていることを指摘している。文語体の受動文は、受動動詞

(P verb) か迂言的受動構文が用いられる点では準文語体と同じであるが、主語と動詞の一致がある点で、文語シンハラ語とは異なる。なお、迂言的受動構文では、Gair and Karunatilaka (1974: 59) が述べている通り、動詞語幹に *nu* を後接させた形式の受動分詞 (passive participle) に *labənawa* (もらう) や *læbenawa* (*labənawa* の受動動詞) を後置した述語形式があるが、意味的な違いはない。また、*wisin* (～によって) で標示される点では、準文語体と同じである。

(16)～(19) は、インターネットで集めたデータと、それらを筆者が一部書き換えたものである。それぞれの例の中で a は受動動詞 (P verb) を用いた受動文で、b は迂言的受動文である。これらの例は、いずれも典型的な受動の意味を持ち、筆者の母語話者としての直感では、a と b の間に受動の意味としての違いは感じられず、双方を入れ替えることが可能である。

- (16) a *puwəṭṭat kalaaweediin wisin lipi liyawe-yi*. <受動動詞受身>
ジャーナリスト よって 記事 書かれる-3.SG
b *puwəṭṭat kalaaweediin wisin lipi liyānu [labə-yi / læbe-yi]*. <迂言的受身>
ジャーナリスト よって 記事 書く.PP もらう-3.SG もらう-3.SG
記事がジャーナリストによって書かれる。
- (17) a *ohu wisin satek mære-yi*. <受動動詞受身>
彼 よって 動物.INDF 殺される-3.SG
b *ohu wisin satek marānu [labə-yi / læbe-yi]*. <迂言的受身>
彼 よって 動物.INDF 殺す.PP もらう-3.SG もらう-3.SG
動物は彼によって殺される。

なお、以下の (18) (19) は、自他双方の意味を持つ動詞の例である。c の例はいずれも与格主語の自発を表す文であり、a, b とは異なるニュアンスを持つ。

- (18) a *æyə wisin giyyak gæye-yi*. <受動動詞受身>
彼女 よって 歌.INDF 歌われる-3.SG
b *æyə wisin giyyak gayānu [labə-yi / læbe-yi]*. <迂言的受身>
彼女 よって 歌.INDF 歌う.PP もらう-3.SG もらう-3.SG
彼女によって歌が歌われる。
- c *æyə-tə giyyak gæye-yi*. <自発>
彼女-DAT 歌.INDF 歌われる-3.SG
彼女はつい歌を歌ってしまう。
- (19) a *æyə wisin nætumak næte-yi*. <受動動詞受身>
彼女 よって 踊り.INDF 踊られる-3.SG
b *æyə wisin nætumak nātānu [labə-yi / læbe-yi]*. <迂言的受身>
彼女 よって 踊り.INDF 踊る.PP もらう-3.SG もらう-3.SG
彼女によって踊りが踊られる。
- c *æyə-tə næte-yi*. <自発>
彼女-DAT 踊られる-3.SG
彼女はつい踊ってしまう。

以上のように、文語シンハラ語にも、受動動詞 (P verb) を用いた受動文と迂言的受動文があり、与格主語構文をとらない限り、典型的な受動の意味において両者を自由に置き換えが可能である。

7. 口語、準文語、文語のシンハラ語受動文の比較

ここでは、(20) a～eの通り、*liyənəwa* (書く)、*gahanəwa* (叩く) を受動動詞 (P verb) に変えた文と迂言的受動文に限定して、口語、準文語、文語のシンハラ語受動文の比較分析を試みる。

- (20) a *simhalen liwəmə ibemə imgrīsiyen liyənəwa.*

シンハラ語.INST 書くと 自動的 英語.INST 書かれる

シンハラ語で書くと、自動的に英語で書かれる。

<口語、受動動詞 (p verb) 文、非典型受動 (自動的・無意志的)>

- b *mee padə wəla dayaa mahatmiya atin liyənəwa.*

この 詩 ダヤー夫人 よって 書かれる

これらの詩はダヤー夫人によって書かれている。

<準文語、受動動詞 (p verb) 文、典型的受動 (他動的・意志的)>

- c *ohu wisin swayam caritaapadaanəyak liyenu labənəwa.*

彼 よって 自伝.INDF 書く.PP もらう

自伝は彼によって書かれる。

<準文語、迂言的受動文、典型的受動 (他動的・意志的)>

- d *puwəṭṭat kalaaweediin wisin lipi liyawe-yi.*

ジャーナリスト よって 記事 書かれる-3.SG

記事がジャーナリストによって書かれる。

<文語、受動動詞 (p verb) 文、典型的受動 (他動的・意志的)>

- e *puwəṭṭat kalaaweediin wisin lipi lliyenu [labə-yi / læbe-yi].*

ジャーナリスト よって 記事 書く.PPもらう-3.SG もらう-3.SG

記事がジャーナリストによって書かれる。

<文語、迂言的受動文、典型的受動 (他動的・意志的)>

まず、全体的に見ると、受動動詞 (P verb) 文は口語、準文語、文語体のいずれにも見られ、準文語体と文語体は典型的な狭義の受動を表すことが可能である。このことは、受動動詞 (P verb) 文が、広義の受動の意味に含まれる無意志的・自動的な非典型的受動文に特化した表現ではないことを示している。

迂言的受動文について、口語体に認められないのは、先行研究で何度も指摘されている通りである。注目したいのは、迂言的受動文が典型的な受動の意味を表すことに特化した表現であることである。

このように、受動動詞 (P verb) による受動文と迂言的受動文の間には、典型的な狭義の受

動文を作ることが可能である点で共通性があり、受動動詞 (P verb) による受動文のみに、無意志的で自動的な広義の非典型的な受動文を作ることができる点で、違いがあることが分かる。従って、双方の受動文は、形式的には異なっているが、典型的な狭義の受動文を作るといふ意味的な関係性は十分に認められるのである。

次に、各例について見る。(20). aでは、受動動詞 (P verb) の *liyāwenāwa* が、自動的に英語に翻訳されていくことを表している。ここでは、その自動性が受動動詞 (P verb) によって表されているのであり、誰かによって意志的に行われたことを表しているわけではない。従って、能動性が低い行為にも適用される広義の受動文としては認められても、典型的な受動文、つまり狭義の受動文としては認められない。

(20). bでは受動動詞 (P verb) の *liyāwenāwa* が、動作主のダヤー夫人によって意志的に行われた行為であることを表している。それにも関わらず、*liyāwenāwa* が用いられるのは、Abhayasinghe (1973: 133) に従えば、意志的で他動的な動作を表す場合でも、準文語体において受動動詞文が用いられるためであろう。この例では受動動詞 (P verb) の持つ無意志化や自動詞化は働かず、狭義での受動化が機能している。ただ、それでも、動作主を示す *atin* が本来的に無意志的動作主に用いられる口語表現での後置詞であることから、口語表現の要素を残している。

(20). cは、迂言的受動文が用いられている点で、狭義の典型的な受動文の意味を持った準文語的表現である。準文語的表現の受動文の動作主を示す *wisin* も持っている。しかし、この例も主語と動詞の一致がないため、純粋な文語表現とは言えない。

(20). dは、受動動詞 (P verb) が用いられているが、(20). bと同様に狭義の典型的な受動文の意味を持っている。dは、主語と動詞の一致が見られるため、文語表現である。

(20). eは、狭義の典型的な受動文の意味を持っていることは勿論のこと、主語と動詞の一致がある、文語特有の迂言的受動表現も用いられていることから、典型的な文語の受動構文であると考えられる。

口語体の受身ではP verbだけが用いられ、意味的には非典型的な受け身に限られる。一方、準文語体と文語体では典型的な受け身も非典型的な受け身も存在し、典型的な受け身の場合はP verbと迂言的受身の置き換えが可能である。

お わ り に

本稿により、受動動詞 (P verb) と迂言的受動文という二つの受動文のタイプの形式的・意味的特徴が整理・分類でき、口語体・準文語体、文語体を横断的に分析した中で、二つの受動文に関係性や連続性があることを指摘できた。つまり、準文語体と文語体においては、受動動詞 (P verb) 文と迂言的受動文が、どちらも典型的な受動文を作ることが可能である。また、受動動詞 (P verb) 文は、スタイルを越えて、非典型的な受動文を作ることが可能である。これは、ダイグロシア的状况の中で、言語がダイナミックに変化することをよく表している。特に準文語体については、その文語文法の規則に則っていないとの理由で正しい表現ではないという意見も聞かれる。しかし、規範文法に従っていないという理由で、研究対象から外してしまうのであれば、生きた言語の妥当性のある分析はできない。今後の課題としては、受動動詞 (P verb) が準文語体や文語体において用いられる場合の意志の有無を調べることである。

liyāwenāwa (書かれる) は意志動詞としても無意志動詞としても使われるが、*gāyenāwa* (歌

われる)と *mærenāwa* (殺される) は無意志動詞としてのみ使われる。今後はデータを補充し、より精密な分析を行うことでその状況と要因を明らかにしたい。

略語

3.SG 三人称単数 DAT 与格 GEN 属格 INDF 不定 INST 具格 LOC 場格 PL 複数
PP 受動分詞

参 考 文 献

- Abhayasinghe, Adikary Arachchuge (1973) *A Morphological Study of Sinhalese*. Ph.D. thesis.. The University of York.
- Gunasinghe, Khema Hemamala Himaransi. (1985) *Passive Voice: a New Perspective, Some Evidence for a Re-analysis from Sinhala*. PhD Thesis. University of Victoria, B.C.
- Gunasinghe, Khema Hemamala Himaransi, and Joseph F. Kess. (1989) Volition, Agency and the Sinhala passive. *Indian Linguistics*. 50: 47-74.
- Inman, Michael V. (1993) *Semantics and Pragmatics of Colloquial Sinhala Involitive Verbs*. PhD Thesis. Stanford, CA: Stanford University.
- Gair, James W. (1970) *Colloquial Sinhalese Clause Structures*. The Hague, Paris : Mouton
- Gair James W. (1998) *Studies in South Asian Linguistics: Sinhala and other South Asian languages*. Oxford: Oxford University Press.
- Gair James W. and Karunatilaka, W.S. (1974) *Literary Sinhala*. Ithaca, N.Y. : South Asia Program and Dept. of Modern Languages and Linguistics Cornell University,
- Henadeerage, Deepthi Kumara (2002) *Topics in Sinhala Syntax*. Ph.D. thesis. The Australian National University, Canberra.
- Pathiraja Piruwanpathi Thero (13 th century) Sidat Sangarawa.
- Shibatani, Masayoshi. (1985) Passives and Related Constructions. *Language*. 61: 821-48.
- Sugunasiri, Suwanda H.J. (1975) *Triglossia or Mesoglossia: the Case of Sinhala*. Paper presented at the Sixth Annual Spring Conference of the Niagara Linguistic Society in Buffalo, New York, April 11, 1975.
- Wijayawardhana, G. D., D. Wickramasinghe and T. Bynon. (1991) Passive-related Constructions in Colloquial Sinhala. In D. C Bennett, G. Hewett and T. Bynon (eds.), *Valency and Control*. 105- 141.

